

どこまでも広がる陰鬱な灰色の空の下、さいはての荒野に老人がたたずむ。

何故こんな所に？ 時折訪れる旅人が気まぐれに訊く。

「道化師を待つてるんだ」

謎かけのような老人の答えにある者は困り、ある者は笑い、ある者は怒りだし。

荒野の喜劇は詰まるどころ一人芝居に過ぎず、老人は単なる観客に過ぎない。

旅人は皆勝手に困り、怒り、笑った。老人はその存在を忘れさせるほど彼らに無関心だった。

「賢明な旅人は誰一人として気付かない。

老人の目の色に。

銀灰色の髪の下、深い皺が刻まれた柔和な目。

彼の目は深く澄んだ瑠璃色をしていた。

ありし日の空を溶かし込んだ懐かしい瑠璃色、空から失われて久しい本来の色だ。

彼は自分が生まれた街を覚えていた。親の顔も友の名も忘れたが、それだけは漠然と記憶していた。

焦茶色の煉瓦塀。蔦に覆われた外壁。漆喰の剥けた内壁。

大きな屋敷に彼は顔知らない家族と共に住んでいた。

家の記憶は家族の記憶と密接に繋がり、彼の胸は甘酸っぱい郷愁でいっぱいになる。

彼の部屋は二階の西の端にあった。

大きな本棚が三方の壁を埋め、床には毛足の長い絨毯が敷かれていた。

白く清潔なカーテンは緩やかに風に翻り、続くテラスからは街が一望できた。

彼はテラスの手摺に座って街を眺めるのを好んだ。

無限大の空の下、赤茶けた家々が無秩序に密集し、運河にはブリキの玩具のような船舶が浮かんでいる。

煙突掃除夫の鼻歌、乳母車の滑車が石畳を削る音、長く尾を引いて空気に溶けてゆく船の汽笛……。

彼は目を細め、心地よい風に身を委ねる。

夢はここで終わる。

今の彼に残されたのは鈍色の空と、荒涼とした大地と、老いさらばえた自分のみ。

皺だらけの瘦せた手に顔を埋めて嗚咽する。

幼い頃、彼はサーカスが好きだった。

親や兄弟、友の顔さえ忘れてしまったのに色鮮やかな風船

の如く華やぎ膨らみゆく高揚感はよく覚えていた。

サーカスが町に来るのは年に一回。あれはその記念すべき日だった。

小遣い銭を握って石畳を敷き詰めた道を駆け、中心の広場を目指す。

やがて視界の彼方に巨大な円錐のテントが現れ、小さな胸が歓喜と興奮に沸く。

テントをくぐりつて棧敷にもぐりこむ。押し合いへし合い群れた子供たちは頬を紅潮させ、大人たちは童心に返って目を輝かす。

ファンファーレが高らかに鳴り響き、満を持してサーカスが開幕する

華やかな照明が交錯する中きらびやかな衣装の少女が登場する。

紳士がステッキを一閃するやシルクハットから鳩が羽ばたき、象は高々と鼻を掲げてライオンは燃え盛る火の輪をくぐる。

観客は拍手喝采した。

彼も痛くなるほど手を叩く。

しかしどんなパフォーマンズにも増して彼の心を掴んで離さないのは道化師であった。

不恰な赤い鼻、縮れた金髪の鬘、分厚く塗った白粉。赤

縞のどぶだぶ衣装を着込み、転び、笑い、また転び、滑稽な一人芝居を演じる男。

観客は笑った。彼も笑った。

舞台袖に退散する道化師に惜しめない拍手が送られる。彼も手が腫れるほど拍手した。

終幕のファンファーレが高らかに響く。

お辞儀をする団員の列に先刻の道化師が並ぶ。

脚光を浴びた道化師がぺこぺこお辞儀し、恰幅の良い団長が声を張って紹介する。

「コイツは一座の晴れ男！ 道化師笑えば雨あがる道化師笑って心が晴れる、本日は絶好のサーカス日和！」

団長の口上が大うけする中、彼は棧敷から身を乗り出し道化師にむかつて叫ぶ。

「来年も来てね！ きつとだよ！」

道化師はびつくりしてこちらを見た。

彼が褒められることは殆どない。所詮は道化役。観客を沸かせる前座でしかない。

だからこそ、絆が生まれる。

とろけるように笑み崩れて力強く手を振り返す道化師と少年は無邪気な約束を交わす。

「きつとだよ！ 待つてるからね！」

道化師は微笑み、小さなファンのために紳士的なお辞儀を

した。

全ての演目が終わるのを待ち、満足した人々はぞろぞろとサーカスを出る。

薄暗い天幕に慣れた目に暮れなすむ寸前の瑠璃色の空は鮮やかに映えた。

少年は道化師とのささやかな友誼を胸に帰り道を急ぐ。新たな友達ができたことを早く報告したい興奮に駆り立てられて走り出し……

刹那、空から鉄の塊が降ってきた。

高台の家に続く坂道で立ち止まった彼の視線の先で、無骨な鉄塊は街の中心に吸い込まれていく。

臉の裏を過ぎるのは手を滑らせて墜落していくブランコ乗りのイメージ。

耳鳴りがして、空が打ち砕かれた。